

行草書における点画の一側面

角 田 健 一 (大 壤)

Kenichi (Tajyou) Tsunoda

展覧会発表の場では、専ら殷周金文を素材とした作品を発表して

いる。無論、書表現における自らの根幹は文字の素材(書体)によって揺らぐものでは、到底ない。しかしながら書体が元来持ち合わせる表情、性質、といった特性や特徴を作用に取り入れ、自身の表現として結び付けるかは、書が、「文字を素材とする造形芸術」である以上、大いに意識せねばなるまい。

行草書における点の効果は、篆書、隸書、楷書のそれとはやや性質が異なる。挙げた三つの書体は「書体の三つの典型」(西川寧『書道講座』)であって、行書、草書の二書体は「補助体」であるという大きな区分差に表れている。

篆書、隸書、楷書のような時代のスタンダードといえるような書体は一般的に一字一字にほぼ統一された面積を与えられている。いわゆる古文に区分される書体(甲骨文、殷周金文)は必ずしもこれに限らないにしても、ある一定の面積に文字を収めようとするれば、

必然的に文字にある制限が生じてくる。

一方、行書、草書といった書体は、一般的に、篆隸楷が与えられるような書写の面積ほど厳密ではない。秦漢の木簡、竹簡に見られる肉筆の早書き文字を「日常書写体」などと称するように、この時期でも字形的に比較的自由で気楽な表現が多くみられる。ただし、草書の創生期(章草)は、木簡や竹簡に書写されていて、幅においては限られた範囲での書写が要求される。この場合、書写される対象そのものが、縦長であるから、文字の上下への余白の意識に限れば、このころからすでに多く見られる。



「不」



「至」



「之」(頓首)

実際に王羲之の尺牘などを見ても、スペースに余裕があれば、文

字の上部に関しては大きな空間を設ける文字も少なくない。

左右への余白の意識は概ね、孫過庭「書譜」あたりから意識されはじめるようである。

王羲之「十七帖」



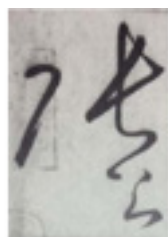
孫過庭「書譜」



右は、王羲之「十七帖」と孫過庭「書譜」の「不」字を抽出したものである。字例が多いので様子の異なる字形ををそれぞれいくつか挙げてみた。どの字形にも共通するのは、最終画の点の距離感である。王羲之「十七帖」では中央から両脇の点の距離は似た字形が多いが、孫過庭「書譜」では右側に大きな余白をつくっていることが明白で、王羲之から時代の下った孫過庭の草書は、王羲之を継承しながらも、その空間の意識には明白な差がある。

懷素「自叙帖」では、偏旁を意識した余白、さらに時代の下った宋代の黃庭堅「李太白憶遊詩卷」などに至って、より発展した左右

の余白を用いた効果が見られる。



懷素
「張公」



黃庭堅
「真人」

王羲之頃には見られない、左右の点画によって生まれる余白、空間の効果は、孫過庭、懷素、黃庭堅らの行草書作家によって生まれ、発展し、その後の書家に大きな影響を与えている。

拙作は、行草書の一点一画の有り方を消化し、制作したつもりであったが、結果的に行書寄りの書体を用いたこと、縦長の紙を用いたこともあって、草稿段階から比較すると、かけ離れたものとなった。どちらにせよその効果は甚だ不十分である。道具等は普段使いたれたものを使用した。

「釈文」 不愧少游

「サイズ」 一三七×三五（半切縦）



不愧少游

137 × 35